

# 非行・犯罪と乳幼児期のそだち

はじめに

最近の非行に関するトピックスといえは、一つには、従来の非行とは異質な内容を発達障害、とりわけ自閉症スペクトラム障害（ASD）との関連で言及したもの<sup>(1)</sup>、さらに遡ると、ADHDと非行・反社会的行動との関係を論じたもの<sup>(2)</sup>がある。

いずれも非行を発達障害との関連で理解している点と共通し、生物学的観点を含めた多次的理解の必要性を説いたものである。しかし、発達障害そのものの成り立ちについては、器質因を背景に考えられているため、本来の発達の視点、すなわち乳幼児期のそだちと非行との関連についてはブラックボックス化されたままである。

すでに筆者は本誌でも、子どもが乳幼児期に主たる養育者（母親）とのあいだでどのよ

うな体験をしているのかを探求する中で以下のことを指摘した<sup>(3)</sup>。

これまで発達障害と診断される際の中核の症状（自閉的対人態度、常同反復的行動、強迫的こだわりなど）は、子どもが母親に「甘えたくても甘えられない」ために生じる強い不安と緊張を少しでも紛らわそうとしたり、軽減しようとしたりするための対処行動として捉えることができること。さらに、落ち着きのなさや挑発的行動などとされてきた症状についても同様に理解することができること。すなわち、ASDのみならずADHDなど対人関係の成立に難しさをもつ発達障害全般において、その病態の成り立ちは、「甘えたくても甘えられない」という子どもの母親に対して抱く心理機制、すなわち「甘え」のアンビヴァレンスによって生起するものとし

て考えられるということである。

非行の萌芽はどこにあるのか

非行は「人の行うべき正しい道からはずれた行い」で、その性格上、反社会的意味合いをもった行動である。ただ、そもそも子どもは幼少期においては何でも面白がつてやるものである。分別のなさゆえだが、そのような振る舞いに周囲の大人たちが困った顔をすれば、ますます面白がつてやりたがる。そこで親はやってもよいこととそうでないことをわからせなくてはならない。それが育児で最も苦労させられるしつけの大切な点のひとつである。ここで問題となりやすいのが、親がやってはいけないとしてしつけようとすると、ますますそれに抗うように執拗にやる場合である。発達障害臨床でよく取り上げられる「挑

発的行動」とされてきたものである。

このような「挑発的行動」の萌芽は二歳台になると顕在化する。そこには母子関係の問題が潜んでいる。子どもがなんらかの事情によって母親に「甘えたくても甘えられない」状態にあるからである。その動因には、自分に関心を向けてもらいたい、構ってもらいたい、相手をしてもらいたい、といった「甘え」がある。子どもが母親に対して抱く強い「甘え」のアンビヴァレンスゆえに生じる不安や緊張を少しでも紛らわそうとするゆえの行動である。その反社会性からこの種の行動は非行の萌芽として捉えることができる。

これは大人の目には、ことさらわざとらしくこちらの怒りを引き出さんがためにやっているように見えるため、「挑発的行動」と称されているが、子どもの側に立って見ると、甘えのアンビヴァレンスゆえに生じる不安と緊張がその背後に働いていることを、われわれ治療者は念頭に置く必要がある。そこで求められるのが、このアンビヴァレンスが生まれた歴史的背景を、母子関係の文脈を中心に理解することである。

### 非行・犯罪と子どものそだち

虚言の事例にみられる母子関係のズレ

俗に「嘘は泥棒の始まり」と言われるよう

に、非行の前兆として「嘘(言)」を認めることは少なくない。それはどのような背景のもとに出現しているのか、具体的に見てみよう。

A子(六歳三カ月 小学一年)

父親の転勤で三年前、家族そろって都会から小さな村に転居している。小学校に入学して数ヶ月後の受診であった。A子と弟、両親の四人家族である。

母親によれば、落ち着きがない、嘘をつく、偏食がひどい、との相談であったが、学校の担任からは給食が喉を通らない状態などの情報も寄せられていた。

逆子で微弱陣痛のため出産には四〇数時間かかった。乳児期から大人しく一人で遊ぶことが多く、よく眠る子どもだった。そのため二歳まで手がかからなかった。しかし、二歳になると、子ども同士で物を取り合うと、相手を噛むようになった。何でもすべて自分の物にしようとする。当時、母親は第二子を妊娠中だったが、出血で安静を余儀なくされていた。それに加えてその前の妊娠で流産していた。

三歳で幼稚園に入ると、人を噛むことはなくなったが、買物で外出するとすぐに動き回り、行方がわからなくなるようになった。探し回っていると、A子は店のサービスカウ

ンターで母親を待っているということがしばしばだったという。以来、落ち着きのない状態が続いている。周りの物にすぐに目が行ってしまう。母親に甘えることがなく、第二子(弟)が生まれると、弟が母親べったりとなり、ますますその傾向が強まった。小学校に入学するとまもなく、給食が喉を通らなくなった。

最近、A子は友だちから仲間はずれにされていると聞いて、母親に泣いて訴えた。母親は思わず抱いてやった。母親に抱っこされたのが嬉しかったのか、しばらくしてから同じようなことを言って母親に抱かれたがるようになった。何度もこんなことが続いたので、母親はA子の言っていることは嘘ではないかと思うようになった。抱かれないがための方便ではないか、こんなことを繰り返して甘やかしている、近い将来嘘つきになるのではないかと心配になったという。

筆者はその後、この子の妊娠中からの経過を母親からくわしく聞いた。すると、次のような背景があることがわかった。

妊娠中、臨月間近に実家に帰って里帰り出産することになった。その時、愛犬も一緒に連れて帰ったら、実家の両親に生まれてくる子どものためによくないと言われ、夫に引き取りに来てもらうことになった。結局、愛犬

は夫の実家に引き取ってもらった。母親は愛犬を手元から失ったペットロスの状態の中でこの子を出産したが、数カ月悲しみが続いた。母親はいまだにペットロスのつらさから立ち直っていない状態であることがわかったのである。

筆者はこれまでの話を聞いてこの母子関係を次のように理解した。

抑うつ状態での出産は、母子間のアタッチメント形成にも深刻な影響を及ぼしたのであることが推測されたが、そこでA子は母親に対して「甘えたくても甘えられない」体験をしたのであろう。その結果、二歳までは母親に対して回避的態度を取っていたが、母親の妊娠を契機に母親に対して微妙な距離をとるようになったのではないかと推測される。

しかし、A子の強いフラストレーションは人に噛みつくという行動として現われ、集団生活の中で孤立感強い不安と緊張をもたらす、給食が喉を通らないという状態を生んだのであろう。

A子の「嘘」は、たしかにA子が母親に抱かれないがゆえの言動であらうが、ここで筆者が取り上げたのは、A子の言動を、母親が事実か否かという論理的次元で考えようとしていることについてであった。A子は実際に

友だちから仲間はずれにされた悲しみを母親に訴え、抱っこされることで「甘え」を味わったのであろう。ただここで大切なことは、このような抱っこされたゆえの言動を字義通りに論理的（理性的）に考えるのではなく、A子の言動を「抱っこされたい」つまりは「甘えたい」という思いの表現として受け止めることである。しかし、抑うつ状態にある母親には困難であったのである。ここに母子間のコミュニケーションの理性的次元と情動的次元でのズレを見て取ることができる。

以上のような説明をすることによって母親は納得し、（物理的に通院は困難であるため）この回で治療は終えた。もちろん、母親が子どもへの「甘え」を容易に受け止めることができなかつた背景に、母親自身の幼少期の「甘え」体験が関係していることは推測されたが、ここでは取り上げなかつた。そのためにはさらなる深い面接を必要としたからである。

学童期ADHDと診断され、思春期に窃盗事件を起こした事例

日男（初診時、八歳五カ月 小学三年）

妊娠中母親の悪阻がひどく二週間ほど入院したことはあったが、満期正常分娩。乳児期、音に敏感で抱っこしてやると眠るが、お

ろすとすぐに泣いてしまう子どもだった。三歳までは大人しく、ミニカーを床に並べて斜めから眺めていることがよく見られ、母親も心配になるほどだった。幼稚園年長組の時、集団行動がとれないと担任から指摘され、運動会の練習が続いた時期に夜驚が出現したこともあった。当時妹が出生していた。以来、妹は母親にさかんに甘えるようになり、妹が何かしてもらっていると自分もと要求する。しかし、それは無理だと母親が言うと、「どうせ僕はいらぬんだ。ゴミ箱に捨ててくれ！」と捨て台詞を吐いていた。時にマンシヨンのエレベータに乗っている最中に突然降りて「僕、ここから飛び降りる！」と言って親を脅すまでになった。

小学一年、入学当初から落ち着きのなさ、集中力のなさが目立っていた。家族一緒にデパートに行った際に、いつの間にか姿が見えなくなつたが、B男の方から一階の受付に「両親が迷い子になった」と訴えて放送してもらおうという笑い話のようなエピソードがある。

二年時、教育センターで遊戯療法を受け、三年時、情緒障害学級に通信開始。その際の就学相談会で医師にADHDと診断され、脳障害が基盤にあるとの説明を受け、B男もそのように理解するようになった。某精神科クリニックを受診したら服薬を勧められた

が、両親は納得できず、筆者のもとに相談に来た。

家族背景が大きく関係した情緒発達の問題が中心にあると考えられたため、B男は女性臨床心理士が担当して遊戯療法を、筆者は母親面接を開始した。母親面接を開始して間もなく、かなり以前から抑うつ状態にあることがわかり、抗うつ剤の薬物療法を開始した。数年間、母子双方の治療を併行して行ったが、目立った改善がないまま時は経過した。母親は家事もできず昼間から横になるなど一進一退の状態が続いた。

その後、筆者の転勤に伴う転院によってB男の治療は男性臨床心理士が担当して再開された。当初はB男も自発的に通院していたが、次第に治療から遠ざかるようになった。その間、筆者は母親面接を継続していた。

薬物療法で明確な手応えは感じられないながらも、面接で少しずつ幼少期の体験が語られるようになった。それによると、DVを思わせるような暴力を振るう実父と、彼の言うままにおとなしく従う実母との間で、いつもびくびくしながら生活を送っていたことがわかってきた。そんな話を聞きながら、時折筆者が感想や意見を差し挟むと、彼女は間髪入れずに頷いて「そうですね」と肯定的な応答を繰り返していた。筆者はそこに彼女が過度

に相手に同調しすぎるところを見て取り、そのことを取り上げた。通常、対話では相手の発言を受け止め、反芻し、ひと呼吸置いて応答するものだが、彼女は自分の考えを押し殺し、相手の話にあまりにも同調しすぎるところが気になったからである。

なぜこのことが重要だと考えたかと言えば、「甘えたくても甘えられない」幼児が母親に認めてもらいたい、相手をしてもらいたいため、自分を殺して母親の意向に過度に同調するという盲動を確認していたからである。つまり、彼女の過度に相手に同調する対人的態度の背景に、筆者は強い「甘え」のアンビヴァレンスが潜在的に働いていることを見て取ったということである。

すると、彼女は「そうですね」と素直に頷くとともに、過去の記憶が次々に蘇ったのか、「私は、高校・大学時代、誰かが何か言う」と、すぐに反論する人間だった。「ああ言えばこう言う」、そんなところがとても目立っていた。そしてさらに「社会人になってまもなく、合同コンパに行った時、男性が何か言うと、すぐに反論して理詰めで相手に駄目出しをしていたことを友人から指摘され、注意されたことがある」という。彼女はそれまでそのことに気づかなかったが、このような話し方をするようになったのは、実父の影

響ではないか。昔、相手を決めつけるような言い方をする実父の前で一切口答えをしなかったが、心の中ではいつも反論していた。だから高校、大学に行き、親から離れた頃より、自分を強く出すようになったのではないか。しかし、友人から注意されたことがショックで、今度は極端に自分を出さないように心がけるようになった。相手の言うことに同調するようになったのはそのためではないかという。幼少期の「甘え」体験の質がその後彼女の過度に同調する態度をもたらすとともに、時には「ああ言えばこう言う」、何事にもすぐに反論する「天の邪鬼」的な対人的構えをも生んでいたことが浮かび上がってきたのである。

この回の面接が大きな契機となり、以来、彼女の声にも張りが出て、落ち着きも感じられるようになった。しかし、母親に改善の兆しが見られて間もない頃、当時中学三年になっていたB男が窃盗事件を起こして警察沙汰になった。かなり悪質な窃盗であるという理由から、教習所鑑別所に入れられ、その後家庭裁判所に送られた。しかし、情状酌量で少年院は見送られた。この体験はB男には随分と堪えたようで、自分のやったことに初めて向き合う契機となった。

まもなく筆者はB男と面接する機会をもつ

たが、彼は過去の自分について以下のようなことを率直に語った。

今回の盗みについては、友だち仲間と一緒に何かをするということの喜びが大きかった。とくに自分にしかできない技術をもっていったことで皆から頼りにされ充実感を味わっていた。それまでは自分を必要とされていなくて、いとおもっていただけだったのであつた。

筆者は面接場面でのB男の態度に、強がりともとれる一歩引いたところがあることを感じ取り、そのことを取り上げた。するとB男は、「昔から積極性はなかった。自分から何かをやるうとは思わなかった。何事をやるにしてもすぐに失敗すると決めつけていたと思う。『失敗は成功のもと』というのは戯れ事だと思つていた」というのである。

そこで筆者は落ち着きがなかった昔の自分を振り返つてどう思うかと尋ねると、「ふざけていた。今日の前のこと以外は考えなかった。へらへらしていた。まともではなかった。気がする。周りを見たくなかった。見たくないものがあつたからだと思う。だから気をそらすようなことばかりやつていた。見たくないものが何か(今は)わからないけど」とまるで内省的に語るのだった。

性的犯罪を繰り返した成人との面接で浮かび上がった関係性の特徴

C男(三〇歳台。軽度知的障。共同作業所に通つている)

施設内でC男は、痴漢、盗撮、トイレの覗き見、性的いたずらなどの性的行動で大問題となつていた。送迎バスの中で女性のお尻を触つた時には「車の振動でつい手が当たつた」と、作業をしている女性に背後から抱きかかえるようにして乳房を触つた時には「彼女が危ないことをしているので、大丈夫かなと思つて手を出した」などと下手な言い訳をする。施設に通う若い女性をレイプして妊娠させてしまふ。そんな性的犯罪といつてもよい問題行動を繰り返していた。彼をどう理解したら良いか困つていたので、面接をしてほしいというのが施設から囑託医である筆者への依頼であつた。

彼が生まれて間もなく両親は離婚し、父親は蒸発。母親も養育能力に欠けていたため、二歳で養護施設に入れられた。物心がついた頃から、施設で彼だけが冷遇されたという。小学校に入學してから学力低下といじめも手伝つて、高学年で特別支援学級に移つた。中学から特別支援学校に通つた。

学校で次第に反抗的態度が目立つようになり、器物破壊や周囲の者に暴力を繰り返して

いた。それでも高等部を卒業後、寮生活しながら一般就労を果たした。しかし、遅刻や上司の指示に従わないなどの反抗的態度が問題となり、まもなく解雇された。その後、しばらくある施設に入つていたが、それも期限切れで退所となつた。暴力が問題となつてグループホームには入れてもらえず、居場所がない状態で、ずっと期限付きの施設を転々とする状態だつた。今はなんとカグループホームに入ることができて、施設のデイサービスで世話を受けている。

C男は施設のみならず隔離された小部屋で単純作業をしていた。がっちりした体格で、強面のする顔つき。やや斜に構え、警戒的な様子だつた。強度行動障の人のような凄味を感じさせ、近寄りがたい独特な雰囲気があつた。

筆者は何から話そうかと戸惑いながら、まずは作業の内容について尋ねていった。ぶつきらぼうで、いかにも仕方ないから答えてやるといふ態度であつた。筆者はついつい彼の機嫌を取るような態度になつていった。

彼がどんな話題に興味を示すのか、私の知つている限りの芸能情報を駆使しながら探つていったが、あまり話に乗つてこない。それでも彼が好きだというサッカーの話題で、次第に話は盛り上がってきた。筆者は少し緊張

が解けた。さらに話題を盛り上げようと積極的に話していくと、彼は途端に話をそらして他の話題に変えた。あまりにも唐突な感じだった。相互理解が深まり、話題が盛り上がった。相対関係になることを殊更回避した反応だと筆者には感じられた。

面接の後半になったので、そろそろ核心に触れなくてはとの思いから、なぜこんなところで作業をしているのかを訊いてみた。すると彼は、「いや、みんなと一緒だとイライラするので、ここがいいのです」と答えた。しかし、彼の手は小刻みに震え、急に落ち着かなくなつた。視線も定まらなくなつた。筆者はこれ以上触れないことにした。

四週間後の二回目の面接。前回と同様、筆者の前で彼は作業の手を休めず、半身の構えを取り続けていた。話し方も淡々とした口調だった。前半は彼の関心事に合わせて話題を選んだ。彼は心を開かず筆者から一歩引いていた。後半、彼の生い立ちについて前回の続きを訊いていった。

小学校高学年からのいじめ、幼少期の施設でのいじめなどに話が及んでいった。さらには両親への恨みにも話が広がっていった。しかし、彼は淡々とした口調で話し続けた。私はただ黙って聞いていた。

一時間の面接が終わりに近づいたので、筆

者は「そろそろ時間だから終わろうかね。何か話しておきたいことがあるかね」と伝えた。すると、驚いたことに彼の態度が突然変わったのである。それは筆者にとって予期せぬ反応であった。それまでは感情を交えず、自分はこれまでひどい育ちを受けてきた、いじめられてきた、などと淡々と話していたが、終わりを告げた途端に、やや哀願口調で、次のようなことを話し始めたのである。「もう少し、親が自分の面倒をみてくれたら、こんなダメ人間にはならなかった。仕事も頑張れた」「こんな俺にしたのは親のせいだ」「自分は彼女ができて結婚するなら、彼女の両親を大切にしたい」などという。

面接で彼が筆者に対して見せた態度の変化は、次のように捉えることができた。

面接の前半から終盤にかけて、筆者は彼の話になんとか合わせようとしていろいろと思いを巡らしながら相手をしていったが、彼はずっと作業の手を休めることなく、斜に構えて応じていた。つまり、彼は筆者に対して一歩引いた状態だったが、面接が終ろうとした途端に、彼は自分から相手を求めるように身を乗り出して相手の気を引くようなことを話し始めたのである。

ここで二者関係の相互の動きのゲシュタルトを描き出すと、「相手が自分の方に近づ

こうとすると身を引くが、逆に相手が身を引こうとすると自分から近づこうとする」と表現することが出来る。そんな関係の特徴をこの時の彼の反応から見て取る事が出来る。まさに「ああ言えばこう言う」天の邪鬼的態度である。

そこで筆者は彼のこのころの動きを感じ取りつつ、肯定的な気持ちを含めながら「あれ、随分と優等生になったね」と返し、また会おうねと伝えて面接を終えた。

すると、次の面接から彼の態度は激変して、作業の手を休めて筆者ときちんと向き合つて話すようになった。その後は筆者も気軽に率直に語り合えるようになり、面接は回を重ねて行つたが、まもなく外での作業ができるようになり順調な経過を辿っていった。

### 非行・犯罪にみられる関係病理

#### 幼児期の関係病理

本稿で筆者は非行・犯罪の萌芽的盲動として「挑発的行動」を位置づけたのは、その起源に子どもが母親に「甘えたくても甘えられない」というアンビヴァレンスがあることを考えたからである。ここで治療を考える上できわめて重要なことは、このアンビヴァレンスの心性が生産を通して、彼らの対人的態度に陰に陽に働いていることに気づくことであ

る。

乳幼児期早期の母子関係において「甘え」のアンビヴァレンスは次のような表現型を取  
ることを筆者は示した。<sup>(5)</sup>

母親が直接関わりとうると子どもは回避  
的になるが、いざ母親がいなくなると心細い  
反応を示す。しかし、母親と再会する段にな  
ると再び回避的反応を示す。

○歳から一歳台において顕在化したこの  
アンビヴァレンスは、いつまでたつても心細  
い状態をもたらすゆえ、子どもに強い不安と  
緊張を生む。そのことが子どもに多様な対処  
行動をもたらす。その一つがここで取り上げ  
た「挑発的行動」である。非行・犯罪の萌芽

をこの「挑発的行動」として捉えることによ  
って、治療をする際の要諦はアンビヴァレン  
スの心理をいかにして捉え扱うかということ  
になる。

したがって、このような対処行動の背景に  
アンビヴァレンスが常に働いていることをわ  
れわれ治療者は見て取ることが求められる。  
それは学童期以後の母親以外の他者との対人  
関係においても思っている。このことを患  
者との面接において治療者は自らとの関係の  
中で感じ取ることが大切になる。アンビヴァ  
レンスの強い心理状態とは「甘えたくても甘  
えられない」という「甘え」に対する強い恐  
れがあることから、その恐れをいかにして軽

減し、肯定的な「甘え」を治療者との間で体  
験できるようにもっていくかが治療の眼目と  
なる。

ただこのような治療が難しいのは、アンビ  
ヴァレンスの存在自体に当事者が気づくこと  
は困難であるからである。しかし、治療者は  
それに気づかなければならない。そのために  
は先ほど述べたような関係の中のこころの動  
きとしてのアンビヴァレンスを、患者との面  
接において気づき、そのことをなんらかのか  
たちで患者自身に気づかせることが必要にな  
る。このような治療によって初めて患者との  
あいだで「甘え」という情動の次元での関係  
が生まれる道が開かれていく。

哲学・現象学・発達心理学・障害児学・児童精神医学など多岐にわたる  
専門分野を融合させながら発達障害の体験世界を理解する。

# 発達障害と 感覚・知覚の世界

佐藤幹夫  
人間と発達を考える会 [編著]

西研・滝川一廣・小林隆児 [著]

## contents

- 第1章 感覚・知覚とは何か——フッサール知覚論から 西研
- 第2章 発達障害における感覚・知覚の世界 滝川一廣
- 第3章 原初的知覚世界と関係発達の基盤 小林隆児
- 第4章 原初的知覚世界と関係発達臨床の実際 小林隆児
- 第5章 「かりいほ」の支援論——「安心」の獲得と体験世界 (知覚・感覚世界)の変容 佐藤幹夫



好評発売中  
本体2400円＋税  
ISBN 978-4-535-56310-0

日本評論社  
http://www.nippyo.co.jp/

### 三つの事例にみる関係病理としてのアンビヴァレンス

最初の小学生の事例においては、非常にわかりやすい形で母子関係のズレを捉えることができるが、思春期以後においてはそれを「患者—治療者」関係の中でアクチュアルに捉えなければならぬ。

第二の事例においては、中学三年になった子どもとの面接において、常に一歩引いたスタンスで面接に臨んでいるところに患者の対人的態度の特徴がよく現れているが、その起源は幼少期の「甘え」のアンビヴァレンスによってもたらされた相手から常に距離をとって動き回るといふ対処行動の発展したものでないかと思われるのである。

この事例において特に注目してほしいのは、筆者が母親面接の中で気づいた、相手に対して過度に同調する態度を取り上げたことによつて、母親自身の幼少期の親子関係、さらには思春期での対人的構えが生々しく想起されたことである。すなわち、幼少期の親子関係から思春期、そして母親になった現在において、首尾一貫してその対人的態度の背景に、「甘え」のアンビヴァレンスが思いついていたことである。

第三の事例では、より一層明確なかたち

で、患者のアンビヴァレンスが面接の中でアクチュアルに浮かび上がっていることが示されている。すなわち「相手が自分の方に近づこうとする」と身を引くが、逆に相手が身を引こうすると自分から近づこうとする「対人的態度である。これこそ幼少期の親子間で体験した「甘え」のアンビヴァレンスが、いま現在の面接において再現していることの証である。精神分析の世界でいうところの「転移」とはこのようなことをいうのであろうが、そのことを肯定的に取り上げることによつて治療関係が劇的に変化していったのは、そこにこそ患者自身が無意識に求めていた「甘え」にまつわる世界があつたからである。

#### おわりに

非行・犯罪という深刻な社会問題と化しやすい問題について、乳幼児期のそだちとの関連で論じた。何かにつけて発達障害が話題となりやすい今日、非行・犯罪についてもややもすれば発達障害との関連で考えられやすい。しかし、それは乳幼児期のそだちとの関連で検討されないことには、その内実を捉えることはできないと筆者は考えている。

本稿で論じたように、幼少期の「甘え」体験の質は、いわゆる発達障害問題のみに当てはめて論じられるようなものではなく、あら

ゆるところのそだちの問題とも深く関係しているものである。表現型がいかなるかたちをとろうとも、その背後に働いている「甘え」のアンビヴァレンスに着目することの重要性を強調したのは「甘え」理論でよく知られている土居<sup>[1]</sup>であるが、筆者はその慧眼に今改めて驚かされている。

#### (文献)

- (1) 土居健郎「甘え」の構造」弘文堂、一九七一年
- (2) 藤川洋子「非行と広汎性発達障害」日本評論社、二〇一〇年
- (3) 小林隆児「親子面接、子ども面接、そして親面接—関係病理としての『天の邪鬼』に焦点を当てて」『そだちの科学』一九九号、三五—三九頁、二〇一二年
- (4) 小林隆児「乳幼児期の自閉症スペクトラムを『甘え』の世界から読み解く」『そだちの科学』二二二号、二八—三四頁、二〇一三年
- (5) 小林隆児「関係」からみる乳幼児期の自閉症スペクトラム—「甘え」のアンビヴァレンスに焦点を当てて—「ミネルヴァ書房、二〇一四年
- (6) 齊藤万比古、原田 謙「反抗挑戦性障害」『精神科治療学』一四巻、一五三—一五九頁、一九九九年